

当事者の「語り」（ナラティブ）が拓く地域共生の可能性 ～鳥大・八頭町連携による「語り・学び・de 愛プロジェクト」の実践報告～

○発表者名 鳥取大学大学院持続性社会創生科学研究科地域学専攻 森下 昇
共同研究者名 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース（竹川研究室）
西村実来（4年）・堀江琉真（3年）
山根昇馬（3年）・郭瑠儀（研究生）
八頭町身体障害者福祉協会 竹内良一
八頭町心身障害児（者）保護育成会 岡田幸子
八頭町家族会 西村公雄
社福）八頭町社会福祉協議会 コミュニティソーシャルワーカー
藤田亮二・山本 誠
社医）明和会医療福祉センター 相談支援センター サマーハウス 相談員
保木本悠二・太田百合
鳥取大学地域学部 竹川俊夫

1. 問題提起

現在、経済的な格差や社会的孤立の広がり、コミュニティの衰退等を背景に、高齢者や障がい者等の福祉サービスを必要とする人々をはじめ、すべての住民が、支え手・受け手の固定された関係を超えて支えあい、自分らしく活躍できる「地域共生社会」の実現が課題になっており、地域においては様々な形で参加の場づくりが進められている。しかし地域の住民活動に目を向けると、そこに障がい者等のマイノリティの姿はほとんど見られないばかりか、彼・彼女らに対する差別・偏見も根深く存在し続けており、現実の地域は、依然として「共生」とは程遠い状況にある。

このような状況を克服し、誰もが包摂される真の共生社会を創造するためには、障がい者等の当事者と一般住民との相互理解を促進し、当事者が直面している生活課題を「我が事」として受け取とめることが必要であり、そのためには福祉学習を通じた人権意識の高揚と当事者理解への働きかけが不可欠である。また、それと同時に当事者自身の社会参加意欲を高めるエンパワメントも必要であり、これらの効果を生み出し、地域全体に広げることができるプログラムの開発・推進が求められている。

2. 目的

本プロジェクトのメンバーは、語り部となる当事者（本人・家族）とその語りを受け止める学生や福祉専門職から構成される。プロジェクトの実施に当たっては、精神医療や家族療法、教育等の多様な分野で成果をあげつつある「語り」（ナラティブ）に着目し、当事者の「語り」と参加者どうしの「対話」によるナラティブ・アプローチを福祉学習プログラムに応用することで、個々のプロジェクトメンバーの変容を促し、当事者理解の促進と当事者自身のエンパワメントの効果を生み出すことを目的とする。これによって期待される具体的な効果は次の通りである。

第一に期待される効果は、「語り」を受け止める学生や福祉専門職が、当事者の障がいや病気並びにそれによって生じる生活上の諸課題に対して正しく理解すること【当事者理解】であり、第二には、「語り」や「対話」の経験を通じて当事者と学生・専門職との距離感を縮めるとともに、相互理解の促進によって当事者が抱える心理的な負担を軽減すること【負担感の軽減】である。第三に期待される効果は、メンバー間の「対話」を通じて、これまで当事者が背負わされてきた生活課題を生み出す社会構造を「ドミナント・ストーリー」として相対化するとともに、生活課題を当事者から「外在化」させ、その対処方法を「当事者研究」の手法を応用しながら「オルタナティブ・ストーリー」として再構成することで、メンバー間の信頼関係や共同性を強化し、当事者の社会参加意欲を高めること【エンパワメント】である。

3. 方法

(1) 参加メンバー

本プロジェクトは、八頭町社会福祉協議会（以下「社協」）と鳥取大学地域学部竹川研究室との連携プロジェクトとして実施されており、竹川研究室からは大学院生1名と学部生3名、研究生（留学生）1名と指導教員の計6名が参加した。社協からは2名のコミュニティソーシャルワーカーが参加するとともに、社協の関係団体である身体・知的・精神の3障がい者団体より会長3名が当事者として参加した。さらに精神保健福祉分野の専門職として相談支援センター・サマーハウスの相談員2名も参加し、2021年4月に計13名で共同研究チームを立ち上げた。

(2) 「語り・学び・de 愛プロジェクト」の実施概要

本プロジェクトは、学生発案で名称を「語り・学び・de 愛プロジェクト」とし、2021年4月の共同研究チームの立ち上げ以降、12月までに以下のような取り組みを実施した。

<5～6月>竹川研究室にてプロジェクトの実施方法の詳細を検討
 <7～8月>「語り」のイメージを掴むため、講師を招いて試験的に「語り」を実施（2回）
 ＊鳥取大学を会場に、八頭町社協・サマーハウスをオンラインでつないで実施
 <9～12月>八頭町の当事者（障がい3団体会長）による「語り」を実施（3回）
 ＊3回とも対面で実施（3回目のみサマーハウスとはオンライン接続にて実施）
 ＊この間、竹川研究室にて学生の感想文の作成と「語り」の文字起こしを実施
 <11～12月>「語り部」の3名へのインタビュー調査を実施
 <12月13日>鳥取大学にてメンバー全員によるグループ討議を実施（テーマ：障がいを隠すこと）
 <12月一杯>竹川研究室にて「語り」の効果分析（記録分析）

（3）「語り」の進め方とテーマ

これまで計5回実施した「語り」のプログラムは、1回当たり2時間半～3時間程度で実施された。前半は、まず冒頭にその回のテーマとなる障がいや病気に関する基礎的なレクチャーを10分程度で学生が行った後、60分程度で司会者（森下）が語り部にインタビューをする形で進められ、休憩後の後半には、語り部とメンバーとのフリーディスカッション（質疑応答）を60分程度実施して終了した。これまで5回の「語り」テーマは以下の通りである。

日付	語り部	語りのテーマ
7月9日（金）	濱崎ひとみ氏（本人）・智熙氏（家族）	統合失調症について（試験）
8月30日（月）	藤田和子氏（本人）・金谷佳寿子氏（支援者）	認知症について（試験）
10月4日（月）	岡田幸子氏（家族）	知的障がいについて
11月1日（月）	西村公雄氏（家族）	統合失調症について
11月29日（月）	竹内良一氏（本人）	内部障がいについて

4. 成果・課題

（1）成果

【①当事者理解】

毎回のプロジェクトが終了した後、学生は「語り」に対する感想文を作成しゼミで発表した。当初は健常者の立場から生々しい差別等に対し傍観的に捉える感想が目立ったが、次第に目線を語り部の立場に置き換えるとともに、障がい者やその家族になったと仮定した場合に自身の中に生じる弱さを直視する感想が見られるようになった。この変化は、当事者に対する「共感」が同情的な sympathy から想像力を駆使した empathy へと変化し、「我が事」として当事者を理解する方向に深まったと捉えられる。一方当事者からも、障がい者であっても種別が異なる障がいや介護する家族の立場については余り知らなかったので非常に勉強になったという声や、相談支援の専門職からも、支援の枠組みとは別の形で当事者の複雑な思いをじっくり伺うことで多くの気づきが得られ非常に参考になったという声が上がった。

【②負担感の軽減】

第3回目以降に語り部を務めた3名へのインタビューでは、これまで当事者である家族について、なるべく隠そうとしてきたが、改めて話す機会を得たことで「気持ちが楽になった」という声や、「学生の感想を読んで、しっかり理解してもらえたことが分かって非常に嬉しかった。参考になるのであればまた話をしたい」といった声があり、「語る」こと自体に加えてメンバーとの信頼関係の強化がポジティブな変化を促し、当事者の負担感の軽減につながっていることが分かった。

【③エンパワメント】

「語り」を通じ、当事者は「恥ずかしい」「障がいを隠したい」という思いが強く、地域活動への参加が困難になるという課題が明確化した。そこで12月13日に「当事者研究」の手法を応用し、「障がいを隠すこと」をテーマにグループ討議を行ったところ、「包み隠さず話すことで相手に伝わる」「このプロジェクトに参加したことで、自分から積極的に話していかないと理解してもらえないことがわかった」等の声上がり、差別・偏見の克服には当事者自身が主体的に住民と交流しながら理解促進に取り組む必要があるとの認識が強まるなど、主体性や参加意欲の向上が見られた。

（2）今後の課題

次年度に向けては、①新たな語り部の発掘・育成、②「語り」の記録化（冊子化）、③本プロジェクトの成果を八頭町内の地区や学校で実施する福祉学習実践としてプログラムを再構築すること、の3点が課題として挙げられる。

以上